



Title	時のメタファーとシェイクスピア
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88420">https://doi.org/10.18910/88420</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 1. はじめに<sup>1</sup>

本研究は、〈時〉という概念を理解するためのメタファーの構造の可能性について、Shakespeare の作品の観察を通して考察する試みである。本稿では *As You Like It* と *Sonnets* を分析対象に選び、これらの作品を通読するとともに、インターネット上のデータベース OpenSourceShakespeare を援用して、“time” および意味関係の深い “year” “month” “week” “day” “hour” “minute” が 2 作品中に出現する箇所を特定した上で、時の経過および時の作用を表す比喩表現に絞って観察した。本稿で考察した *As You Like It* の引用は Hattaway ed. (2000) を参照し、*Sonnets* の引用は Burrow ed. (2002) を参照した。本稿中の引用の下線部はすべて筆者による。

本研究のきっかけとなったのは、筆者が開講する今年度（2021 年度）の言語文化研究科博士前期課程の春夏学期の科目「認知レトリック論研究 A」での受講生との討論であった。感染症予防のためオンライン会議システムを用いた遠隔授業を余儀なくされたが、受講生諸氏の真摯な取り組みにより、実りある議論ができ、筆者自身も大いに刺激を受けた。<sup>2</sup>

## 2. 経過する〈時〉

### 2.1 Shakespeare の「名言」を手がかりに

上記の授業では、「名言から学ぶ認知レトリック」を討論のテーマに掲げた。『シェイクスピア名言集』（小田島雄志著、1985）や『英語名言集』（加島祥造著、1993）を討論のための資料とし、名言の中に見えるレトリックに、認知言語学の観点から光を当ててみようという試みであった。

この授業で、Shakespeare の次の名言を取り上げた回があった。

- (1) Time travels in diverse paces with diverse persons. (Shakespeare, *As You Like It*, III. ii.)  
 (時はそれぞれの人によってそれぞれの速さで歩むものです。(小田島雄志訳))

小田島（1985）はこの名言が描く「心理的時間」について、「われわれの身のまわりにも流れている。授業時間は遅々として進まないのに、昼休みはあっという間に過ぎてしまう、というように。あるいは、小学生のころは悠然たる大河と見えた時が、年をとるとともに飛沫をあげる急流と思われてくる、というように。」と述べる（pp. 142-143）。

### 2.2 〈時〉の経過に関する Lakoff and Johnson の概念メタファー

この心理的時間について、認知言語学の観点からはどのように分析すればよいのか。授業における討論で、受講生からは Lakoff and Johnson (1980, 1999) の時の経過に関する 2 種類のメタファーの見解が提示された。〈時が動き、人（＝時を観察する者）が静止する〉というとらえ方と、〈人が動き、時が静止する〉というとらえ方である。Lakoff and Johnson (1980) は、時の経過に関するこの 2 種類の概念化とそれぞれの用例を次のように表記している。

TIME IS A MOVING OBJECT

The time will come when ...

The time has long since gone when ...

The time for action has arrived.

TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT

As we go through the years, ...

<sup>1</sup> 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている。基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)、基盤研究(C)「英語メタファーの認知詩学 II」(研究代表者大森文子、分担者渡辺秀樹)、基盤研究(C)「英詩メタファーの構造と歴史 II」(研究代表者渡辺秀樹、分担者大森文子)。

<sup>2</sup> 本授業を受講し議論に参加された受講生諸氏、TA として討論の活性化に寄与された博士後期課程 2 年の岡部末希氏、同科目「認知レトリック論研究」を開講されている関係で本授業に参加され多くの有益なコメントをくださった渡辺秀樹教授に感謝申し上げたい。

As we go further into the 1980s, ...

We're approaching the end of the year. (Lakoff and Johnson (1980:42-44) 参照)

さらに、Lakoff and Johnson (1999) は、この 2 つの概念化についてさらに精緻化して議論し、メタファーの名称を、THE MOVING TIME METAPHOR と THE MOVING OBSERVER METAPHOR という簡潔明瞭なものに変更している。それぞれのメタファーに関わる空間スキーマや、概念領域間の写像をまとめると、以下のようになる。

#### THE MOVING TIME METAPHOR

〔空間スキーマ〕

物体を観察する人 (observer) が一人、静止して、一定方向に顔を向けている。たくさんの物体が無限に長く続く連なりとなり、一列で動いていて、人の前から後ろへと通り過ぎていく。それらの物体は動く方向に正面を向けているものとして概念化される。(p. 141 参照)

〔概念領域間の写像〕

動く物体を見ている観察者がいる場所が〈現在〉と、観察者の前に広がる空間が〈未来〉と、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉と、動く物体が〈時〉と、観察者のいる場所を通り過ぎていく〈時〉の動きが〈時の経過〉と対応関係を結んでいる。

The Location Of The Observer	→	The Present	
The Space In Front Of The Observer	→	The Future	
The Space Behind The Observer	→	The Past	
Objects	→	Times	
The Motion of Objects Past The Observer	→	The "Passage" Of Time	(p. 142 参照)

#### THE MOVING OBSERVER METAPHOR (or THE TIME'S LANDSCAPE METAPHOR)

〔空間スキーマ〕

観察者は、一定の場所にとどまることなく動いている。観察者はいくつもの場所をたどって行くが、その経路上の場所ひとつひとつが、ひとつの〈時〉である。

〔概念領域間の写像〕

観察者がいる場所が〈現在〉と、観察者の前に広がる空間が〈未来〉と、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉と、観察者が動いてたどる経路上にある場所が〈時〉と、観察者の動きが〈時の経過〉と、観察者が動いた距離が〈経過時間の長さ〉と対応関係を結んでいる。

The Location Of The Observer	→	The Present	
The Space In Front Of The Observer	→	The Future	
The Space Behind The Observer	→	The Past	
Locations On Observer's Path Of Motion	→	Times	
The Motion of The Observer	→	The "Passage" Of Time	
The Distance Moved By The Observer	→	The Amount Of Time "Passed"	(p. 146 参照)

### 2.3 Rosalind の〈時〉の概念化

上記の Lakoff and Johnson の 2 種類のメタファーは説得力が高く、〈時〉という概念を動きの観点からとらえる認知言語学研究は、彼らの見解を基盤とするのが通例である。筆者の授業の受講生が、上記の名言 (1) の時の経過のメタファーを考察するにあたり、Lakoff and Johnson の見解を分析の手立てとしようとしたのも無理からぬことである。

そこで授業では、(1) の名言の前後のコンテキストにまで観察の範囲を広げることを受講生たちに勧めた。(1) は *As You Like It* 3 幕 2 場における主人公 Rosalind が男装で正体を隠したまま恋人 Orlando に語りかける台詞である。この台詞の前後のコンテキストを以下に引用する。

(2) ROSALIND Then there is no true lover in the forest, else sighing every minute and groaning every hour would detect the lazy foot of Time as well as a clock.

ORLANDO And why not the swift foot of Time? Had not that been as

proper? 260  
 ROSALIND By no means, sir. Time travels in diverse paces with diverse persons. I'll tell you who Time ambles withal, who Time trots withal, who Time gallops withal, and who he stands still withal.  
 ORLANDO I prithee, who doth he trot withal?  
 ROSALIND Marry, he trots hard with a young maid between the contract 265  
 of her marriage and the day it is solemnized. If the interim be but a sennight, Time's pace is so hard that it seems the length of seven year.  
 ORLANDO Who ambles Time withal?  
 ROSALIND With a priest that lacks Latin and a rich man that hath 270  
 not the gout; for the one sleeps easily because he cannot study, and the other lives merrily because he feels no pain; the one lacking the burden of lean and wasteful learning, the other knowing no burden of heavy tedious penury. These Time ambles withal.  
 ORLANDO Who doth he gallop withal? 275  
 ROSALIND With a thief to the gallows; for though he go as softly as foot can fall, he thinks himself too soon there.  
 ORLANDO Who stays it still withal?  
 ROSALIND With lawyers in the vacation; for they sleep between term and term, and then they perceive not how Time moves. 280

(William Shakespeare, *As You Like It*, III. ii. 256-280.)

Rosalindの「だらだらした時の歩み」(“lazy foot of Time”(l. 257)) という言葉に反応したOrlandoが、なぜ「速やかな時の歩み」(“the swift foot of Time”(l. 259))と言わないのか、その方が適切ではないのかと尋ねる。ここまでのやりとりは一見、Lakoff and Johnson (1999) の THE MOVING TIME METAPHOR の具現化のように思える。Rosalindはこの問いかけに対し「時が進む速度は人によって違う」(“Time travels in diverse paces with diverse persons.” (ll. 261-262)) と答える。これが小田島(1985)が名言と認定した(1)の台詞である。Rosalindは“‘I’ll tell you who Time ambles withal, who Time trots withal, who Time gallops withal, and who he stands still withal.’” (ll. 262-263) と続ける。

ここで注目すべきは、Timeを主語とする3つの動詞 (amble, trot, gallop) の使用である。<sup>3</sup> これら3つの動詞の意味に共通するのは、すべて馬の歩き方あるいは走り方に由来するということである。*The Oxford English Dictionary (OED)* にはそれぞれの語の原義が次のように示されている。

**amble** v. 1.a. *intransitive*. Of a horse or other quadruped. To move forwards at the gait or pace of an amble (AMBLE n. 1). More generally: to move at a smooth, easy, or leisurely pace.

**trot** v. 1.a. *intransitive*. Of a horse, and occasionally other quadrupeds: to go at the gait called the trot (see TROT n.<sup>1</sup> 1).

**gallop** v.<sup>1</sup> 1.a. *intransitive*. Of a horse (occasionally of other quadrupeds): to go at a gallop (see GALLOP n. 1).

OEDではこれらの原義に基づく比喩義も記載されていて、それぞれの比喩義の用例として、*As You Like It* 3幕2場の当該箇所が掲載されている (OED “amble” v. 2.a., “trot” v. 1.c., “gallop” v.<sup>1</sup> 5.a. 参照)。

上記の原義の指示に従い、“amble” “trot” “gallop” の名詞用法を参照する。“amble” は日本語では「側対歩」と呼ばれる馬の歩き方で、OEDでは「スムーズで気楽な足取り」 (a smooth or easy gait) であり、「特に長距離の乗馬に適した足取り」 (particularly suitable for long-distance riding) であると記されている (OED “amble” n. 1. 参照)。

“trot” は日本語では「斜対歩」あるいは「速歩 (はやあし)」と呼ばれ、OEDによると「歩きと走りの中間」 (between walking and running) で、「対角線の二脚 (右前脚と左後脚、左前脚と右後脚) をほぼ同時に動かす」 (the legs move in diagonal pairs almost together) 馬の歩き方である。<sup>4</sup>

<sup>3</sup> 厳密に言えば、“...and who he stands still withal” (l. 263) における “stand” も動きに関連する動詞だと言えるが、ここでは動きを止めた状態を表すので、いったん除外して考える。

<sup>4</sup> 筆者の授業でテキストとした『シェイクスピア名言集』(小田島雄志著、1985) では、上記の名言 (1) に続く文

“gallop” は日本語では「襲歩」あるいは「競走駆歩」と呼ばれ、馬の最も速い駆け方を言う。OEDでも「馬（時にその他の四足獣）の最も早い動き」（The most rapid movement of a horse (occasionally of other quadrupeds)）であり、その動きでは「一駆けするたびに、脚が胴体の下で曲がって馬の体が完全に地面から離れる」（in the course of each stride the animal is entirely off the ground, with the legs flexed under the body）と説明されている。

Rosalind はさらに、時が上記の三種の歩み方をするのはどんな人の場合なのかという Orlando の問い（264行目、269行目、275行目）に順次答える。時が trot するのは婚約してから式を上げるまでの娘の場合で、その間がたったの7日間だとしても、時の足取りはとても辛そうで、7年もの長さに思えてしまう（265-268行目）。時が amble するのはラテン語を知らない司祭の場合や、痛風にかかっていない金持ちの場合で、前者は勉強ができないからよく眠れるし、無駄な学問という重荷を背負っていない。後者は痛みを感じないから愉快地暮らすことができ、重くうんざりするような貧乏の重荷を知らずに済む。こういう人たちと一緒に進む時はゆったりとした足取りになる（270-274行目）。時が gallop するのは絞首台へ引かれていく泥棒の場合で、できるだけ足をそっと着地させても、あっという間に到着してしまったと思う（276-277行目）、と。

これら3つの動詞が本来は馬の足取りを表すことをふまえた上で、これらの動詞が登場する直前に Rosalind が言った “Time travels in diverse paces with diverse persons.” (ll. 261-262) を再度観察すると、“paces” も一般的な意味での「速度」ではないことに気づく。OEDでは、

**pace** *n.* 6.a. Any one of the various gaits of a horse; *esp.* a recognized trained gait such as the walk, trot, canter, or gallop. Also in figurative context.

との語義が示され、この Rosalind の台詞が用例として挙げられている。ここでは “diverse paces” が馬のさまざまな足取りを元の意味とする比喩義で用いられているのである。

これらの観察から、(2) における Rosalind の台詞は、馬術用語の比喩で統一されていることがわかる。そして注目すべきは、“withal” や “with” といった前置詞の多用が明瞭に示すように、馬に喩えられた時が、人を乗せてともに動き、なおかつ乗り手の心理状態をまるで馬の如く意識しているということである。trot する時は挙式前の娘を乗せ、amble する時は司祭や金持ちを乗せ、gallop する時は処刑される泥棒を乗せて動く馬として描かれ、乗り手の気持ち（娘は目的地に早く到着したいと焦り、司祭や金持ちは愉快で気楽、泥棒は処刑を免れないことを諦めながらも少しでも遅らせたいとむなしく願う気持ち）を反映した動きである。

さらに、ここまで観察していなかった「時が人を乗せたまま立ち止まって動かない」場合についての Rosalind の Orlando への説明（278-280 行目）に目を向けると、休暇中の弁護士が挙げられている。休暇中、すなわち裁判所の開廷期と開廷期の間は弁護士は眠って過ごすため、時の経過が感じられない、と。確かに時の動きを感じるのは人間が起きて活動しているときであり、眠っている人にとっては時も止まったままである。

人馬一体となったこのような動きの観点から時の経過を捉える認識のしかたは、先に言及した Lakoff and Johnson (1980, 1999) の THE MOVING TIME METAPHOR や THE MOVING OBSERVER METAPHOR とは異質なものである。THE MOVING TIME METAPHOR では〈時〉が動き、それを観察する〈人〉は動かない。THE MOVING OBSERVER METAPHOR では〈時〉は動かない風景のようなもので、それを観察しながら〈人〉の方が動く。Rosalind のメタファーはそのいずれでもなく、〈人〉を観察者 (OBSERVER) としてではなく馬上の騎手 (RIDER) として認識する、〈乗馬のメタファー〉 (THE HORSE RIDING METAPHOR) と名付けることができよう。

---

脈を、「そのあと彼女は具体例をいくつか示す。時がよちよち歩きをするのは、婚約してから式を上げるまでの娘。時がのんびり歩きをするのは、ラテン語を知らない神父（勉強をしなくてすむ）と通風をわずらっていない金持ち（なんの苦痛もない）。時が全力疾走するのは、絞首台に引っ立てられる泥棒。時が完全停止するのは、休暇中の弁護士。」(p. 152) と説明している。「婚約してから式を上げるまでの娘」のくだりにおける時の動作を表す語は、Shakespeare の原文では “trot” である。この “trot” の解釈を授業では話題にし、参考資料として小田島雄志訳『お気に召すまま』（1983）も参照したところ、同様に “trot” は「よちよち歩きをする」と訳されていた。“amble” には「のんびり歩きをする」、「gallop」には「全力疾走する」という訳語が充てられ、馬の足並みを表す語としても通用するが、“trot” の「よちよち歩きをする」は、馬の動きを連想しがたく、また、この訳語では、“amble” と “trot” が表す速度の違いが逆になっているようにも感じられ、少々語弊があるのではないだろうか。



【表 1】Rosalindの〈乗馬のメタファー〉(THE HORSE RIDING METAPHOR)

根源領域〈乗馬〉		目標領域〈時の経過〉
馬	⇒	時
騎手		人
馬は騎手と共に動く		時は人とともに動く
馬は騎手により進み方を変える		時は人により速度を変える
馬が側対歩 (amble) で進む		時がのんびり経過する
馬が走るよりは遅い斜対歩 (trot) で進む		時が速くはない速度で経過する (もどかしい)
馬が全力疾走 (gallop) で進む		時が全速力で経過する
馬が停止する		時が停止する

Rosalindの(2)の台詞は、時の経過についての概念化の可能性が、〈時が動き人が動かない〉か、〈人が動き時が動かない〉かの二者択一ではないことを教えてくれる。ただし、*As You Like It* における時の経過を表す表現の基盤となる認識が〈乗馬〉のメタファーのみというわけではない。たとえば2幕7場で、森で暮らす老公爵たちに「人も寄り付かないこの荒れ地で、鬱蒼たる木々の枝の陰で、緩やかに過ぎていく時をやり過ごしておられるあなた方がどのようなお方が存じませんが、…」(But whate'er you are / That in this desert inaccessible, / Under the shade of melancholy boughs, / Lose and neglect the creeping hours of time – (II. vii. 109-102)) というOrlandoの台詞には、このような緩慢な動き方をする〈時〉と、去っていく時を無頓着にやり過ごす〈人〉が描かれ、そこにはTHE MOVING TIME METAPHORが反映されている。Rosalindの(2)の台詞に見られる認識は独特なものであり、この場面以外には表現されていない。しかし、この台詞は、概念領域の要素とその対応関係を詳細に示し、写像の構造に論理的整合性があるという点で高い説得力をもつ。そして、時を過ごす私たちのその時現在の心理状態や、未来の出来事に対する認識(期待や恐怖など)によって、時の経過の速さが異なるように感じるという感覚を巧みに説明してくれる。

## 2.4 Shakespeareの独自性

上述したRosalindの台詞からうかがえるようなShakespeare独特の〈時〉の経過の捉え方は、他の作品には表現されているのだろうか。筆者はまだShakespeareの諸作品を広く観察するには至っていないが、Sonnets 154篇の中には〈時〉の経過に関する特異な概念化が見られる。

(3) Like as the waves make towards the pebbled shore,  
 So do our minutes hasten to their end,  
 Each changing place with that which goes before,  
 In sequent toil all forwards do contend.  
 Nativity, once in the main of light,  
 Crawls to maturity, wherewith being crowned  
 Crookèd eclipses 'gainst his glory fight,  
 And Time that gave doth now his gift confound.  
 Time doth transfix the flourish set on youth,  
 And delves the parallels in beauty's brow,  
 Feeds on the rarities of nature's truth,  
 And nothing stands but for his scythe to mow.  
 And yet to times in hope my verse shall stand,  
 Praising thy worth, despite his cruel hand. (Sonnet 60)

この詩の1行目から4行目で描かれる〈時〉は“hasten”(2行目)という語が示すようにかなり速い速度で動いているが、その動きの向きに着目したい。上述したLakoff and Johnson (1999) のTHE MOVING TIME METAPHORにおける空間スキーマと概念領域間の写像は、〈時〉が〈観察者〉の前から後ろに向かって動く。観察者の前に広がる空間が〈未来〉に、観察者の後ろに広がる空間が〈過去〉に対応しているから、〈時〉の動きの方向は未来から過去であり、前方の未来からやって来て後方の過去へと去っていくものとしてとらえられている。一方、(3)の1行目から4行目では、〈時〉は終わりに向かって(to their end)動いている。〈終わり〉は〈未来〉にあるから、ここで

描かれる〈時〉の動きの向きは過去から未来へ向かう方向である。しかも〈時〉は Lakoff and Johnson の空間スキーマが示すような無限に続く縦一列の連なりではなく、浜辺に向かういくつもの波（1 行目）に喩えられ、むしろ横に並んでいることがわかる。これらの波の如く、〈時〉は互いに後先を入れ替わりながら（3 行目）、競い合って前方向に（forwards）進んでいる（4 行目）。

5 行目以降に描かれる人間の一生の経過を見ると、新生児が成長していく様を「這う」(Crawls) と移動を表す動詞で示している。新生児の生れ出た場所は “the main of light” と記されている。“main” は「広大な場所」(a broad expanse (OED “main” n. 5.<sup>†</sup>c.)) という意味を持ち、またここでは 1 行目の “waves” との関連で「外洋」(the open sea (OED “main” n. 5.a.)) の意味が想起される (Burrow ed. 2002, p. 500 参照)。そうすると、ここで描かれた幼少期から壮年期、老年期への推移の描写からは、波とともに（波に乗って）移動していく人のイメージが浮かび上がる。馬に乗った人のイメージとは異なるが、ここでも〈時〉と〈人〉がともに終わりに向かって同じ方向へ移動するという Shakespeare 独特の〈時〉のメタファーが見て取れる（この詩の後半に見られる〈時〉のメタファーの様々な行為については、次節で考察する）。

As You Like It と同様、Sonnets でも、時の経過に関して Lakoff and Johnson が示した概念化が見られないわけではない。〈時が動く〉(THE MOVING TIME METAPHOR) および〈人が動く〉(THE MOVING OBSERVER METAPHOR) というメタファー認識は、むしろ頻繁に表現されている。〈時〉が休みなく速足で動くとするとらえ方は “never-resting Time” (Sonnet 5, l. 5)、 “swift-footed Time” (Sonnet 19, l. 6)、 “Or what strong hand can hold his [= Time’s] swift foot back?” (Sonnet 65, l. 11)、 “the fleeting year” (Sonnet 97, l. 2) に示されており、やって来て過ぎ去っていく様子を描く表現は “Who will believe my verse in time to come, / If it were filled with your most high deserts?” (Sonnet 17, ll. 1-2)、 “Against that time (if ever that time come) / When I shall see thee frown on my defects,” (Sonnet 49, ll. 1-2)、 “Ruin hath taught me thus to ruminate, / That Time will come and take my love away. (Sonnet 64, ll. 11-12)、 “she knows my days are past the best,” (Sonnet 138, l. 6) に見られる。また、〈人が動く〉というメタファー (THE MOVING OBSERVER METAPHOR) は、Lakoff and Johnson が THE TIME’S LANDSCAPE METAPHOR という別名をつけたことからわかるように、その空間スキーマでは〈時〉は動かず風景の役割を果たしており、その風景の中を〈人〉が動くというメタファーであるが、このメタファーも Sonnets において具現されており、 “thou among the wastes of time must go” (Sonnet 12, l. 10) という表現では〈時〉が荒野に喩えられ、その中を人が動いていくという認識が示されており、また “For if you were by my unkindness shaken, / As I by yours, y’have passed a hell of time,” (Sonnet 120 ll. 5-6) では〈時〉が地獄に喩えられ、愛する青年がその地獄の中を通り過ぎてきたことを詩人は想像している。

しかし Shakespeare は、〈時〉の経過に対するそのような慣用的なとらえ方にとどまることなく、〈時〉と〈人〉が「ともに動く」というとらえ方をも詳細な描写で示して見せた。次の (4) では〈時〉の動きが「こそ泥のような前進」(thievish progress)<sup>5</sup> と表され、〈人〉の動きについては明示されていないが、鏡で自分の顔に皺を認めたときに墓穴が口を開けて待っていることが思い起こされるという文脈 (5-6 行目)、また〈時〉の向かう先が「永遠」(eternity) である (8 行目) ということから、〈人〉も墓穴に入る、すなわち死後の永遠に向かう運命であることが暗示され、(3) と同様、〈時〉と〈人〉が手を携えて終焉という未来に向かって移動するというメタファー認識が反映されていると言える。ここには Shakespeare 独特の感性の鋭さがあると言えよう。

- (4) The wrinkles which thy glass will truly show  
Of mouthèd graves will give thee memory;  
Thou by thy dial’s shady stealth mayst know  
Time’s thievish progress to eternity. (Sonnet 77, ll. 5-8)

### 3. 〈時〉が人間に及ぼす作用

#### 3.1 悪事をはたらく〈時〉

前節では〈時〉の経過についての Shakespeare の独特の描き方と、その基盤となっている感性の鋭さを観察した。第 3 節では、〈時〉が人間に及ぼす影響力の大きさについて特に悪事の観点から

<sup>5</sup> OED “thievish” *adj.* では語義 3 として “3. Of, pertaining to, or characteristic of a thief or thieves; thief-like; furtive, stealthy.” という定義が示され、Sonnets 77 のこの箇所が用例として掲載されている。

描く表現を Shakespeare の *Sonnets* から観察する（本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文は、Shakespeare とほぼ同時代の詩華集・詩語集に記載された Time への修飾語を確認して同時代の詩人の共通イメージを浮き彫りにするとともに、*Sonnets* と *The Rape of Lucrece* および *Twelfth Night* における Time への呼びかけの比較観察により、Shakespeare が Time に対して持つネガティブなイメージとポジティブなイメージの両方について詳細に論じているので参照されたい）。

〈時〉と人間の関係についての理解に強く結びついている認識は、人間の命に限りがあるということである。Lakoff and Turner (1989, pp.34-35) が述べる通り、人間は誰もが一定の時間を割り当てられており、その割り当て時間が費やされると死ぬという認識が、生命についての文化モデルを成立させている。<sup>6</sup> 割り当て時間との関連で死を理解するこの文化モデルに基づき、〈時〉という概念は人間に様々な悪事を働くものとして認識される。Lakoff and Turner (1989) は〈時は泥棒である〉(TIME IS A THIEF (pp. 35-40))、〈時は刈る者である〉(TIME IS A REAPER (p. 41))、〈時は貪り食う者である〉(TIME IS A DEVOURER (pp. 41-42))、〈時は破壊する者である〉(TIME IS A DESTROYER (pp. 42-43))といったメタファーを挙げ、これらのメタファーを反映した詩作品の例を示している。

〈時は刈る者である〉というメタファーを図像化したものがいわゆる〈時の翁 (Father Time)〉で、大鎌 (scythe) を持ち、砂時計を持つことも多く、時に前髪を残した禿げ頭の老人として描かれる (OED “time” n. 34. b. 参照)<sup>7</sup>。〈時の翁〉の図像の歴史的変遷について詳細な解説を記したパノフスキー (2002) は「ルネサンス美術やバロック美術においては、『時の翁』は通常翼を持ちたいいて裸である。大鎌か手鎌という彼がもっとも多くの場合に携えている持物の他に、砂時計、自分の尾を噛む蛇もしくは竜、黄道十二宮などが付け加えられたり、あるいはそれらが大鎌や手鎌の代りとなることもある。松葉杖をついている例も多い。」(pp. 142-143) と述べている。

Shakespeare の *Sonnets* にもこの〈時の翁〉の擬人化に基づく描写が多数見られる。大場 (編注訳、2018) は、美しい青年への愛、黒い女 (Dark Lady) への愛を描くこの *Sonnets* を二幕構成の劇作品として読み通すことを試み (p. xiii)、1 番から 126 番までを Act I とし、127 番以降を Act II として編集しているが、19 番に描かれた〈時〉に関する注釈として「Time の手にする scythe」と題する 1 頁にわたる解説を記し (p. 53)、〈時〉を「*The Sonnets Act I* をとおしての大いなる敵役」と位置づけている。大場はこの解説において、〈時の翁〉を描いた 2 つの図版を示している。1 つは「Crispin de Passe (the Elder), 1590 年頃」とのキャプションが付された図で、時の翁は両手に大鎌を持ち、翼を広げて空中を飛びながら地上を見下ろし、地上では倒されて息絶えた人間たちが横たわり、上方に “SIC TRANSIT GLORIA MUNDI” (= Thus the Glory of the World Passes Away.) との文言が見える。もう 1 つの図版には「Otto Cornelisz van Veen の Emblem 画集 (1612) より」とのキャプションが付され、この図でも時の翁は背中で翼を広げているが、空中を飛ぶのではなく地上を走りながら、両手で大鎌を頭上高く振りかざしている。その足元には横たわりながら怯えた目で翁を見上げる男性たちが描かれ、翁の向かう先には煉瓦造りの建物の陰でおのく女性たちの姿が見える。2 つの図版はともに Shakespeare と同時代のもので、当時の〈時〉のとらえ方を明確に可視化していると言える。<sup>8</sup>

では、Shakespeare は *Sonnets* において、〈時〉がその手に何を持ち、人間にどのような仕打ちをするものとして描いているのだろうか。

### 3.2 Shakespeare が描く〈時〉の持ち物 (attributes) と行為

*Sonnets* を通読すると、〈時〉に対する上記の大場の「*The Sonnets Act I* をとおしての大いなる敵役」という特徴づけは的を射たものであり、この連詩集では〈時〉を人間に悪事を働く者として

<sup>6</sup> Lakoff and Turner (1989) は “One of our major cultural models of life is that each of us is allotted a certain fixed time on earth. Our allotted time will eventually be used up, and we will die.” (pp. 34-35) と述べる。

<sup>7</sup> “Frequently with capital initial. The personification of this. Also called (*Old*) *Father Time*. Conventionally represented as an aged man carrying a scythe and frequently an hourglass; sometimes also as bald except for a single lock of hair (see also *to take Time by the forelock* at Phrases 6g; but cf. OCCASION n.1 1b).” (OED “time” n. 34. b.)

<sup>8</sup> Shakespeare と同時代の詩人 Robert Herrick (1591-1634) の “To the Virgins, to Make Much of Time” と題する詩には “Gather ye rosebuds while ye may, / Old time is still a-flying.” (ll. 1-2) とあり (Pollard ed., 1898 参照)、時の翁が飛翔している様子が描かれている。Crispin de Passe (the Elder) の図像に共通する〈時〉のとらえ方である。さらに、Shakespeare と同時代の詩人による擬人化された Time の描写の詳細については、当時の詩華集・詩語集に記載された修飾語を綿密に観察した本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文を参照されたい。



見るとえ方が際立つ。まず、悪事を実行する〈時〉の〈手〉に着目した詩は3編ある(60番、63番、64番)。前節の(3)で引用した60番では“*And yet to times in hope my verse shall stand, / Praising thy worth, despite his cruel hand.*” (13-14行目)のように形容詞“*cruel*”が〈時〉の〈手〉の性質を表し、また下記のように63番では“*injurious*”が、64番では“*fell*”が“*hand*”を修飾している。いずれも〈時〉の〈手〉が冷酷、無慈悲に人間に害を及ぼすものとして描いている。

(5) Against my love shall be as I am now,  
With Time's injurious hand crushed and o'er-worn, (Sonnet 63, ll. 1-2) <sup>9</sup>

(6) When I have seen by Time's fell hand defacèd  
The rich proud cost of outworn buried age,  
When sometime lofty towers I see down razèd  
And brass eternal slave to mortal rage; (Sonnet 64, ll. 1-4) <sup>10</sup>

60番では、“*cruel*”と形容された〈時〉の〈手〉によってなされる様々な残虐行為が列挙されている。(3)では60番全体を引用したが、ここではその行為の列挙の部分のみを再掲する。

(7) Nativity, once in the main of light,  
Crawls to maturity, wherewith being crowned  
Crookèd eclipses 'gainst his glory fight,  
And Time that gave doth now his gift confound.  
Time doth transfix the flourish set on youth,  
And delves the parallels in beauty's brow,  
Feeds on the rarities of nature's truth,  
And nothing stands but for his scythe to mow. (Sonnet 60, ll. 5-12)

(7)では、〈時〉の人間に対する仕打ちを表す5種類の動詞が示され、人間にかつて与えたものを破壊する(*confound*)<sup>11</sup>、花の盛りの青春を刺し貫く(*transfix*)<sup>12</sup>、美しい人の額に幾筋もの溝を掘る(*delves*)、自然が生んだ完全無欠の見本の数々を貪り食う(*feeds*)、あらゆるものの命を大鎌(*scythe*)で刈り取ってしまう(*mow*)という〈時〉の有害な所業が描かれる。

では、その冷酷、無慈悲な〈時〉の〈手〉は、人間に害を及ぼす道具として何を持つのか。

まず、〈時の翁〉の文化モデルが示す通り、〈大鎌〉(*scythe*)を挙げている詩は上述の60番に加え12番、100番、123番の計4編、〈手鎌〉(*sickle*)を挙げている詩は116番、126番の2編である。これらは本来、草刈りや農作物の収穫のための道具であるから、人間を〈植物〉と見立て、その命を植物のように〈刈り取る〉という性質を帯びるものとして〈時〉を描いていることがわかる。

(8) When I do count the clock that tells the time,  
And see the brave day sunk in hideous night;  
When I behold the violet past prime,  
And sable curls all silvered o'er with white;  
When lofty trees I see barren of leaves,  
Which erst from heat did canopy the herd,  
And summer's green all girded up in sheaves,

<sup>9</sup> ここでの“*injurious*”は「不当に有害な」(*unjustly harmful*)の意味。Burrow (2002, p. 506) 参照。

<sup>10</sup> ここでの“*fell*”は「冷酷な」(*cruel, ruthless*)の意味。Burrow (2002, p. 508) 参照。

<sup>11</sup> Schmidt (1971, vol. I) は Sonnet 60 における“*confound*”の意味を“*to destroy, to ruin, to make away with*”と定義づけている (p. 234)。

<sup>12</sup> Duncan-Jones (ed. 1997) はこの詩の9行目への注釈で、〈時〉が大鎌のような尖った先端を持つ道具を携えており、それで若者の花盛りの若さを刺し貫く様子が想像されている (“*Time is imagined as armed with a sharp-pointed instrument (such as his traditional scythe) which pierces ('transfixes') the flourishing beauty of the young.*” (p. 230)) と解説している。本稿ではこの解釈を採用したが、一方、Schmidt (1971, vol. II) はこの“*transfix*”について「取り除く」 (“*to transplace, to remove*” (p. 1251)) という定義を与えている。OEDの見出し語“*transfix*”にはそのような定義は見当たらないが、大鎌が除草のためにも用いられる道具であることを念頭に置くと、Schmidtの解釈も捨てがたい。

Borne on the bier with white and bristly beard:  
 Then of thy beauty do I question make,  
 That thou among the wastes of time must go,  
 Since sweets and beauties do themselves forsake,  
 And die as fast as they see others grow,  
 And nothing 'gainst Time's scythe can make defence  
 Save breed to brave him when he takes thee hence. (Sonnet 12)

12番は、詩人が愛する青年の行く末を案じる詩であるが、3行目の“violet past prime”（盛りを過ぎた堇）、5行目の“lofty trees I see barren of leaves”（落葉した高木）、7行目の“summer's green”（夏の日の緑）で植物のイメージを重ね、青年を〈植物〉の観点からとらえる素地を作り出している。“summer's green”という言い回しは何の植物かを明記してはいないが、束ねられて縛られ（girded up in sheaves）白い剛毛（white and bristly beard）を見せながら運ばれていく（Borne on the bier）という記述（7-8行目）からは、収穫された穀物が想起され（Duncan-Jones ed. 1997, p. 134参照）、<sup>13</sup> “summer's green”は夏の畑一面に広がる美しい緑色の描写であることが想像される。この記述の後に9行目で“thy beauty”と青年の美しさに詩人は思いをはせ、美しい者はいずれ、他の者が成長する（この“grow”も人間のみならず植物の生育をも想起させる）のと同じ速さで死んでいかねばならないことを嘆く（10-12行目）。この美しい植物と美しい青年の併記は、両者を同一視するとらえ方を想起させる。その上での13行目における「時の大鎌」（Time's scythe）の配置は、人間の命を奪う〈時〉の性質を表す比喻としての〈大鎌〉の描写に説得力をもたせている。

116番では〈時〉のもつ手鎌（sickle）が描かれるが、ここでも、その直前で唇（lips）の色や頬（cheeks）の血色を表す表現として“rosy”が配され、可憐な薔薇の花が無残にも手鎌に刈られるイメージが浮かび上がる。〈人〉の命のはかなさを〈植物〉の観点からとらえるメタファーである。

(9) Love's not Time's fool, though rosy lips and cheeks  
 Within his bending sickle's compass come; (Sonnet 116, ll. 9-10)

Shakespeareが描く〈時〉の持ち物は鎌だけではない。命のはかなさにおいて植物に等しい人間にとっては、大鎌や手鎌でも十分に恐ろしいが、〈時〉は人間の命よりもはるかに頑丈なものをも打ち壊す。

(10) Since brass, nor stone, nor earth, nor boundless sea,  
 But sad mortality o'ersways their power,  
 How with this rage shall beauty hold a plea,  
 Whose action is no stronger than a flower?  
 O how shall summer's honey breath hold out  
 Against the wreckful siege of batt'ring days,  
 When rocks impregnable are not so stout,  
 Nor gates of steel so strong, but time decays? (Sonnet 65, ll. 1-8)

65番の1行目で示された“brass”や“stone”は、1つ前の64番の記述と併せて読むと、その意味が明確になる。上記（6）の引用で示した通り、64番では贅沢で華やかな建造物（rich proud cost）<sup>14</sup>が〈時〉の冷酷な手（Time's fell hand）にかかり、高くそびえた塔（lofty towers）が崩れ落ち、永遠と思われた真鍮の記念碑（brass）が死の破壊力に屈服しているさまが描かれる。この記述をふま

<sup>13</sup> Duncan-Jones ed. (1997, p. 134) はこの詩の7-8行目の“summer's green all girded up in sheaves, / Borne on the bier with white and bristly beard:”について注釈で“a richly inclusive image of crops which have been cut and harvested, with an implicit personification of the trussed-up and white-bearded corn (formerly green) as an old man being carried to his grave. Though a bier could be any kind of barrow or litter for carrying heavy goods, its strongest association was with the portage of dead bodies, as in Ophelia's 'They bare him barefaced on the bier' (Ham 4.5.177-8).”と述べ、収穫され荷車で運ばれる穀物と墓地へ運ばれていく老人のイメージの比喩的重なり言及している。

<sup>14</sup> この“rich proud cost”について、Burrow (2002) は“lavish, showy extravagant things”と解釈している。また、Duncan-Jones (1997) は“suggests the expensive splendour of elaborate funeral monuments, such as those to be seen in Westminster Abbey or St Paul's.”と述べている。

えて65番に目を向けると、1行目の“brass”からは真鍮の碑が、“stone”からは石碑あるいは石造りの建物が想起される。両者とも、時を超えて永続させることが意図された建造物である。しかしそれらは大地や海と同様、結局は悲惨な死に屈服するのだから、一輪の花ほどの力しかない美がその猛威に立ち向かえるはずがなく、槌で叩きつける（batt’ring）ような日々の攻撃に夏の甘い息吹が耐えられるわけがない、堅固な岩（rocks impregnable）も鉄の城門（gates of steel）も、時の破壊行為に耐えられるほど強くはないのだから、と65番は述べる。6行目の“batt’ring”について Burrow (2002) は“The days are like battering rams.”と注釈をつけている。battering ramとは、城壁や城門などを破るのに用いられた「破壊槌」と呼ばれる攻撃用具である。65番の記述からは、〈時〉が植物を刈り取る鎌どころか、破壊槌という圧倒的な武器をも持つことが含意されており、岩であろうと城門であろうと、真鍮や石で造られた記念碑でも建物でも容易に破壊する力をもつこと、このような〈時〉の猛威に対し、植物ほどの力しかもたない人間（4行目の“no stronger than a flower”の直後の5行目の“summer’s honey breath”も人間の息を夏に咲く花の甘い香りに喩えた表現として解釈できる）が立ち向かえるはずがないことが示されている。

さらに注目に値するのは、Shakespeareは上記のような〈時〉の情け容赦のない派手な破壊行為のみならず、もっと地味で微妙な、しかし詩人にとっては許しがたい、美に対する損傷行為を描いていることである。それは、詩人の愛する美しい青年に皺を刻むという行為である。

- (11) My glass shall not persuade me I am old,  
 So long as youth and thou are of one date,  
 But when in thee time’s furrows I behold,  
 Then look I death my days should expiate. (Sonnet 22, ll. 1-4)

22番3行目の“time’s furrows”は「皺」を指すが、furrowは元来「鋤で地面に付けた溝、畝間」を表す語であるから（OED “furrow” *n.*, 1.a の定義 “A narrow trench made in the earth with a plough, esp. for the reception of seed.” 参照）、ここでは〈時〉の持ち物として〈鋤〉（plough）が（明示されてはいないが）含意されていると言える。青年の滑らかな肌を平らな地面に見立て、そこに〈時〉が〈鋤〉で皺という溝を作っていくというイメージが喚起される。

100番では、〈時〉が人の顔に皺をつける行為は“grave”（彫る）という動詞で示されている。

- (12) Where art thou, Muse, that thou forget’st so long  
 To speak of that which gives thee all thy might?  
 Spend’st thou thy fury on some worthless song,  
 Dark’ning thy pow’r to lend base subjects light?  
 Return, forgetful Muse, and straight redeem  
 In gentle numbers time so idly spent.  
 Sing to the ear that doth thy lays esteem,  
 And gives thy pen both skill and argument.  
 Rise, resty Muse, my love’s sweet face survey,  
 If Time have any wrinkle graven there;  
 If any, be a satire to decay,  
 And make Time’s spoils despised everywhere.  
 Give my love fame faster than Time wastes life,  
 So thou prevent’st his scythe and crookèd knife. (Sonnet 100)

(12)は詩の女神（Muse）に呼びかけ、〈時〉が我が物顔に青年の美しさに傷をつけ台無しにするという行為（Time’s spoils）<sup>15</sup>に対抗するよう促す詩である。14行目では〈時〉の持ち物として大鎌（scythe）と刃の曲がったナイフ（crookèd knife）が挙げられている。前者は〈時の翁〉の伝統的文化モデルが示すように人の命を植物のように刈り取る道具であるが、後者は（10行目の“graven”という語が示すように）言わば彫刻刀のごとき役割を果たして若々しい顔に皺を彫りつけ、人間に老いをもたらす道具であると言える。

<sup>15</sup> Duncan-Jones (ed., 1997, 310) では100番12行目の“Times’ spoil”について“time’s conquest of beauty, or marring of it”と説明している。

- (13) Devouring Time, blunt thou the lion's paws,  
 And make the earth devour her own sweet brood,  
 Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,  
 And burn the long-lived phoenix in her blood,  
 Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,  
 And do whate'er thou wilt, swift-footed Time,  
 To the wide world and all her fading sweets:  
 But I forbid thee one most heinous crime,  
 O carve not with thy hours my love's fair brow,  
 Nor draw no lines there with thine antique pen.  
 Him in thy course untainted do allow  
 For beauty's pattern to succeeding men.  
 Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong,  
 My love shall in my verse ever live young. (Sonnet 19)

19 番は〈時〉に対して「時の翁よ」(“old Time” (13 行目)) と明示的に呼びかける詩であるが、ここでは〈時〉の悪事の残忍さと俊敏さを “Devouring Time” (1 行目) や “swift-footed Time” (6 行目) のように Time に付された修飾語で示し、<sup>16</sup>「獅子の爪をすり減らす」「大地に自分が育んだ子供らを食らわせる」「虎の顎から鋭い歯を抜き取る」「不死鳥を生きたまま焼く」「季節を楽しくも悲しくも変える」「この広い世界やそのはかない美に対して好き放題のことをする」といった〈時〉の残虐で勝手気ままな行為を列挙し、そのすべてを承認した上で、「だが一つ、最も凶悪な罪だけは犯すことを禁ずる」(“But I forbid thee one most heinous crime,” 8 行目) と言い渡す。それは、詩人の愛する人の美しい額に時間を刻む (carve) こと (9 行目)、古く奇怪なペン (antique pen)<sup>17</sup> で線を描く (draw) こと (10 行目) である。ここでは〈時の翁〉の持ち物としてペンが明示され、また “carve” という動詞からは彫刻刀が暗示されている。

一般的な常識に照らせば、大鎌や手鎌の切断力、あるいは破壊槌の破壊力に比べ、ペンや彫刻刀からはさほどの威力は感じられず、恐怖感も喚起されない。しかし、ペンや彫刻刀を用いて若く美しい肌に皺をつけるという行為を「最も凶悪な罪」(one most heinous crime) とする詩人の記述からは、その行為を、大鎌や手鎌、破壊槌を振るって命を奪ったり建造物を破壊したりする残虐行為にも劣らぬ非道で許しがたい行為として詩人が嫌悪していることがうかがえる。

では、ペンや彫刻刀の威力とは何か。真っ白な紙にペンで一旦線を引けば、二度と真っ白な紙には戻らない。同様に、滑らかな素材に彫刻刀で線を一彫り刻んだだけで、元の滑らかな表面に戻ることは二度とない。ペンや彫刻刀は小さな道具でありながら、それらには、いわば「取り返しのつかないことをやってのける力」があると言える。この〈復元不可能な変更を加える力〉は、〈時〉の作用の〈不可逆性〉に写像される。人は「あの頃に帰りたい」「時を戻したい」といくら願っても、その願いがかなえられることはない。詩人にとっては、その虚しさを最も強く感じるのが、愛する人の美しく滑らかな肌に皺が刻まれているのを見る瞬間なのであろう。その瞬間が来ることに対する恐怖が、詩人の「だが一つ、最も凶悪な罪だけは犯すことを禁ずる」(But I forbid thee one most heinous crime) という〈時〉への呼びかけの強い語調に表れている。

当然のことながら、〈時の翁〉の〈復元不可能な変更を加える力〉から〈時〉の作用の〈不可逆性〉への写像は、〈時の翁〉のいずれの持ち物を用いても成立する。大鎌や手鎌で切断された物はいずれもはや元通りに戻ることはなく、破壊槌で粉砕された物も同様である。むしろ、大鎌や手鎌や破壊槌の殺傷能力、破壊力の高さの方が容易に〈不可逆性〉への写像を喚起させるとも言える。しかし、Shakespeare は伝統的文化モデルに示された顕著な殺傷力を誇る武器のみに頼ることなく、ペンや彫刻刀といった、本来芸術のために用いる小さな道具にまで着目し、〈時の翁〉にこれらを持たせることにより、〈死〉への恐怖のみならず〈老い〉への恐怖、特に恋人の美しい肌に皺を認

<sup>16</sup> 19 番の Sonnet における Time への形容辞 (epithets) については本プロジェクト報告書掲載の渡辺秀樹教授の論文も参照されたい。

<sup>17</sup> Duncan-Jones (ed., 1997, 148) は “antique pen” について “an old pen, but also one that produces grotesque or fanciful effects” と説明している。



める瞬間の衝撃と嫌悪をも〈復元不可能な変更〉の観点から効果的に描写して見せたのである。  
 Shakespeare の *Sonnets* において言及された、あるいは含意された〈時の翁〉の持ち物 (attributes) とその用途、それらと〈時〉の作用との対応関係をまとめると以下の通りである。

【表 2】Shakespeare の *Sonnets* における〈時の翁〉のメタファー写像

根源領域 〈翁〉		⇒	目標領域 〈時〉
〈持ち物〉	〈用途：復元不可能な変更を加える〉		〈作用：不可逆性をもつ〉
大鎌 (scythe)、手鎌 (sickle)	命を刈り取る		人に死をもたらし (命を奪う)
破壊槌 (battering ram)	建造物を打ち砕く		建造物を朽ちさせる
鋤 (plough)、刃の曲がったナイフ (crooked knife)、ペン (pen)	皺の線を刻む (描く)		人に老いをもたらし (若さを奪う)

#### 4. 終わりに

本研究では *As You Like It* と *Sonnets* に描かれた〈時〉と人との関わりを表す比喩表現を観察し、Shakespeare の時間認識を考察した。

Shakespeare にとって〈時〉は、単に未来からやって来て過去へと通り過ぎていくだけのものではない。人間が通り過ぎながら眺める風景のようなものというだけでもない。馬のように、あるいは波のように人を乗せ、未来に向かって人とともに進むという動きもする。と言っても、人に寄り添う伴侶のような存在ではない。人に危害を加える残虐非道な老人ともなる。ただし、その悪事の道具は広く世に知られた大鎌や手鎌のみではない。破壊槌を振り回すこともある。と思うとペンや彫刻刀を道具に悪事を働くこともある。それは殺傷能力の高い他の武器を用いた悪事に比べれば、〈時〉にとっては落書き程度のちょっとした悪戯に過ぎないのかもしれない。しかしその悪戯は、恋人の美しさをこよなく愛する詩人にとっては許しがたい凶悪犯罪なのである。

Shakespeare の〈時〉は、かくも複雑な存在である。誰もが目を留めて見惚れる美しい姿を繊細な技術で造り上げておきながら、暴虐な振舞いに及んでその抜きん出た美を奪い取ってしまう (“Those hours, that with gentle work did frame / The lovely gaze where every eye doth dwell, / Will play the tyrants to the very same, / And that un-fair which fairly doth excel.” (Sonnet 5, ll. 1-4))<sup>18</sup>。いわば創造神と破壊神の両方の性質を兼ね備えた、気まぐれで実に手に負えない存在である。

このような残忍な暴君としての〈時〉 (“bloody tyrant Time” (Sonnet 16, l. 2)) に対して、人間はどうすればよいのか。Shakespeare は果敢にも対抗の手立てを考え、青年に子孫を残させることで〈時〉の大鎌に立ち向かおうとしたり (“And nothing ’gainst Time’s scythe can make defence / Save breed, to brave him when he takes thee hence.” (Sonnet 12, ll. 13-14) 他)、自らが著す詩で青年の若さや美しさを永遠に残そうとしたりする (“Yet do thy worst, old Time: despite thy wrong, / My love shall in my verse ever live young.” (Sonnet 19, ll. 13-14) や “And yet to times in hope my verse shall stand, / Praising thy worth, despite his cruel hand.” (Sonnet 60, ll. 13-14) など)。〈時〉が持つペンという持ち物に対抗して、自らもペンを武器に戦おうというわけである (“You still shall live (such virtue hath my pen)” (Sonnet 81, l. 13))<sup>19</sup>。かと思えば、人間の無力さを思い知り、「私は嘆きながら時のご機嫌を伺うしかない」 (“I must attend time’s leisure with my moan,” (Sonnet 44, l. 12)) と弱気になったり、万物が栄枯盛衰の運命を免れないことを思い、いつか愛する人が〈時〉に奪われることを怖れて泣いたりもする (“When I have seen such interchange of state, / Or state itself confounded to decay, / Ruin hath taught me thus to ruminate, / That Time will come and take my love away. / This thought is as a death,

<sup>18</sup> OED の見出し語 “unfair” v. には “transitive. To deprive of fairness or beauty.” との語義が記され、用例として Sonnet 5 の当該箇所 1 例のみが記載されている。

<sup>19</sup> Duncan-Jones (1997) は Sonnet 19 の 9-10 行目の、詩人の愛する人の美しい額に時の翁が古く奇怪なペンで線を描くことを禁ずる呼びかけ “O carve not with thy hours my love’s fair brow, / Nor draw no lines there with thine antique pen.” に見られる “no lines” について、この歓迎すべからざる線 (lines) が、詩人が永遠に残そうとする詩行 (lines) と対比関係にあると指摘する (“Time’s unwelcome lines are in contrast to the poet’s eternal lines in 18.12.” (p. 148))。この指摘からは、時の翁の持つペンが皺というラインで恋人の若さを奪い、それに対抗する詩人のペンが詩行というラインで恋人の若さを永遠に保たせるという対立の描写を Shakespeare が意図したことがうかがえる。

which cannot choose / But weep to have that which it fears to lose.” (Sonnet 64, ll. 9-14)。

これらの描写には絶大な力を誇る〈時〉に対する詩人の揺れる思いが表れ、私たちの〈時〉に対する多角的な認識のしかたを映す鏡のようにも思える。Shakespeare のメタファーは、いつも人の生活のすぐ傍にある〈時〉という存在が、理不尽で無慈悲で手に負えない存在でもあるという誰もが経験する思いを雄弁に活写している。

## 参考文献

- 安部知二 (訳) (1939) 『お気に召すまま』 東京：岩波書店。  
Burrow, Colin (ed.) (2002) *The Complete Sonnets and Poems*. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press.  
Cowden-Clarke, Mary (1881) *The Complete Concordance to Shakespeare*. London: Bickers & Son.  
Duncan-Jones, Katherine (ed.) (1997) *Shakespeare's Sonnets*. The Arden Shakespeare. London: Bloomsbury Publishing Plc.  
Hattaway, Michael (ed.) (2000) *As You Like It (The New Cambridge Shakespeare)*. Cambridge University Press.  
加島祥造 (1993) 『英語名言集』 東京：岩波書店。  
川西進 (編注) (1971) *Shakespeare's Sonnets*. 東京：鶴見書店。  
Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.  
----- (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.  
Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.  
嶺卓二 (編注) (1974) *Sonnets by William Shakespeare*. 東京：研究社。  
鍋島弘治朗、楠見孝、内海彰 (編) (2019) 『メタファー研究2 (特集：時間のメタファー)』 東京：ひつじ書房。  
小田島雄志 (1985) 『シェイクスピア名言集』 東京：岩波書店。  
小田島雄志 (訳) (1983) 『シェイクスピア全集 お気に召すまま』 東京：白水社。  
大場建治 (編注訳) (2018) 『ソネット詩集』 (研究社シェイクスピア全集別巻) 東京：研究社。  
大森文子 (2018a) 「喜びと悲しみのメタファー：Shakespeare の *Sonnets* をめぐって」『レトリック、メタファー、ディスコース (言語文化共同研究プロジェクト 2017)』 (渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、19-28。  
----- (2018b) 「人の心と空模様：シェイクスピアのメタファーをめぐって」『メタファー研究1』 (鍋島弘治朗・楠見孝・内海彰編) 東京：ひつじ書房、175-104。  
----- (2021) 「Shakespeare の *Sonnets* における逆転のレトリック」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』 (渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、2021、15-27。  
パノフスキー、エルヴィン (著)、浅野徹・阿天坊耀・塚田孝雄・永澤峻・福部信敏 (訳) (2002) 『イコノロジー研究』 (上) 東京：筑摩書房。  
Pollard, Alfred (ed.) (1898) *Robert Herrick: The Hesperides & Noble Numbers*. Vol 1. London: Lawrence & Bullen.  
Schmidt, Alexander (1971) *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* Vols. I and II. New York: Dover Publications.  
Schoenfeldt, Michael (ed.) (2007) *A Companion to Shakespeare's Sonnets*. MA: Blackwell.  
瀬戸賢一 (2017) 『時間の言語学—メタファーから読み解く』 東京：筑摩書房。  
高松雄一 (1986) 『ソネット集 (シェイクスピア作)』 (岩波文庫) 東京：岩波書店。  
Vendler, Helen (1997) *The Art of Shakespeare's Sonnets*. Cambridge: Harvard University Press.  
渡辺秀樹 (2019) 「英詩感情語メタファーの系譜第2回 シェイクスピア『ソネット集』のレトリック再考：感情語の類義・反義を中心に」『レトリックとコミュニケーション (言語文化共同研究プロジェクト 2018)』 (大森文子編) 大阪大学大学院言語文化研究科、1-10。  
----- (2021) 「ソネットに見える繰り返しのレトリック再考：“when~then~”の繰り返しの中心に」『感情・感覚のレトリック (言語文化共同研究プロジェクト 2020)』 (渡辺秀樹編) 大阪大学大学院言語文化研究科、2021、3-13。  
吉田健一 (2007) 『シェイクスピア／シェイクスピア詩集』 東京：平凡社。

OpenSourceShakespeare, George Mason University, 2003-2022. (<https://www.opensourceshakespeare.org/>)  
The Oxford English Dictionary Online, Oxford University Press, 2022. (<https://www.oed.com/>)